

「ラムサール湿地の保全を」

美々川・ウトナイ湖を愛する人たちの声

ルポライター
滝川康治

何万年もの間に支笏・恵庭・樽前の火山噴出物が降り積もった、美々川周辺の丘陵地帯から染みだす湧き水は、澄みきった溪流を生み、ゆつくりと蛇行する流れと湿原を形成しながらウトナイ湖へと注ぐ。

この美々川源流部を縦断する形で最大幅四百m、長さ約四十kmの巨大な水路を掘削して、洪水時に本流に呑み込

この保全対策に対する自然保護団体の反発は予想されたことだったが、地元鳥越忠行苦小牧市長も「問題のない川に人工装置を付けるのは理解しに

地下水脈を寸断する巨大水路

でもあり、夏場は魚、秋から春にかけては鳥獣を追う。だから、勇払原野の隅々まで熟知しているし、自然に対する愛着も人一倍強い。訪れるカヌー愛好者も人一倍強い。訪れるカヌー愛好者も人一倍強い。訪れるカヌー愛好者も人一倍強い。

荒木さんの穏やかな口調に熱がこもった。「組合としても、いろんな集まりに参加したりして、事あるごとに声を上げていきたい」と力を込めた。

新ルート案によると、美々川流域の地下水の寸断を防ぐために七百四十億円の巨費を投じて止水壁の設置などの保全対策を講じる、という。が、土木技術で自然をねじ伏せようとするこの手法を施しても、「地下水の一部低下」や「ハンノキなどの植生の変化が生ずる」と、同局がまとめた「技術報告」は記している。

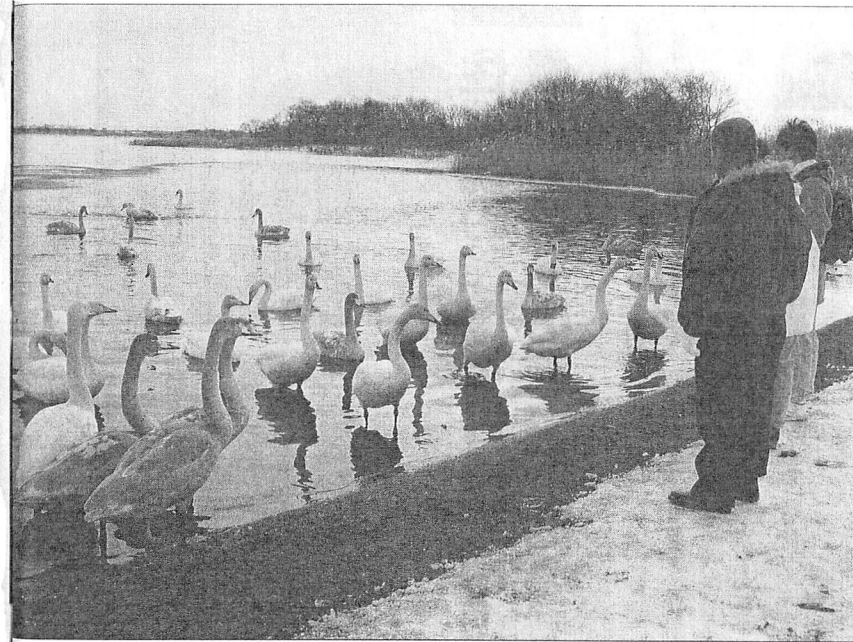
たし、おびたしいサケが美々川を遡上した。川の水量も多かった。組合の水揚げはエビやコイ、ドジョウなどが主体で、ワカサギの放流にも力を入れている。ふ化場と協力してベニザケの捕獲も行なっており、捕れた魚は蓄養してふ化事業に供する取り組みが軌道に乗ってきた、という。昨年からは年一回、組合と日本野鳥の会ウトナイ湖サントリアリとの共催で、市民と一緒に魚の放流や捕獲などを行なう「漁業体験の集い」も開く。

好者に、美々川の魅力語りかけることも多いらしい。美々川とウトナイ湖の自然の恵みがあつて成り立つ仕事に携わるだけに、千歳川放水路計画には疑問が募る。「川に手をつけなくて、このままの姿で残してほしい。放水路の掘削の影響でウトナイ湖や美々川の水位の低下は絶対あると思う。せっかく、いろんな生き物がいるのに、放水路ひとつのために自然が破壊されてしまうならば、ラムサール条約の指定をした意味がなくなる」

道開発局が描く千歳川放水路計画だ。昨年、美々川の源流部を東に迂回する新ルート案が道に示されて、国の計画に明記されてから十二年目にして仕切りなおしとなった。計画見直しで総事業費は四千七百億円と、当初見込みの二倍以上に膨れ上がった。放水路の掘削で地下水脈を寸断してしまうために、国内四番目のラムサール条約登録湿地の環境破壊を憂慮する自然保護団体などと開発局の間で、長年にわたる論争が繰り返されてきた。

の保全を」

豊かな地下水脈の寸断を生じてしまう千歳川放水路の掘削。それは、ラムサール条約登録湿地のウトナイ湖と、そこに注ぐ美々川の死を意味する。道開発局は、身近な自然を愛する地元の人たちの声に真摯に耳を傾けるべきだ。



ハクチョウが飛来する冬のウトナイ湖

残してほしい魚の宝庫

「朝起きて、何が掛かっているのか見るのが楽しみなんだ。今はドジョウの産卵期の終わりで、これからはコイやウナギ、ベニザケの季節になる。ここウナギはドンコロコロみたくに太いんだよ。美々川は曲がりくねっているから、

魚や鳥もたくさん棲める。こない川は道内でも少ないんだよ」六月下旬のある朝、美々川中流部に架かる橋のたもとで、ウトナイ漁業組合長の荒木義信さん(57)が顔をほころばせた。二日前に川に入れておいた四個の仕掛けのなかには、ドジョウがびっしり入っている。

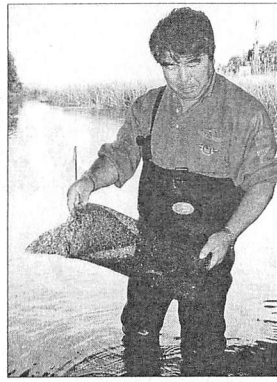
苦小牧市内のタクシー会社勤務と漁師の「二足のワラジ」の生活が長い。ウトナイ湖と美々川を漁場にする組合員は四〇〇五〇代を中心に12人いて、全員が半労半漁である。自然を残したいという気持ちもあつて、荒木さんは三年前に組合長の職を引き受けた。「父親の血を引き継いだのか、わたしも好きでね、若いころから川に携わってきた。夜中に(湖や川を)歩いて、どこに何があるのか分かるんだ」と話す荒木さんは、ウトナイ湖から四kmほど上流の美々川の近く(苦小牧市植苗)で生まれた。標本採取に世界中を歩くほどの腕前だったマタギ(猟師)の父親の船に乗って、幼いころから湖や美々川を庭のようにして育つ。少年時代は魚の宝庫で、一時間も船に乗ると大ぶりのコイが五〜六本も捕れ

「くい」と記者会見で疑問を投げかけたほどで、評判は芳しくなかった。土木屋的発想で川を大改変することで、失

乾燥化で激変した植生分布

「静かなウトナイ湖に波を立てたことばかり国はやるんだ。まわりの湿地や川があつて初めて、サンクチュアリやラムサール条約湿地として意味があるのに、ゴルフ場や放水路で取り巻いてしまったら駄目になるのは時間の問題なんですよ」

ウトナイ湖周辺の植生調査をライフワークにしてきた、恵庭市在住の植物

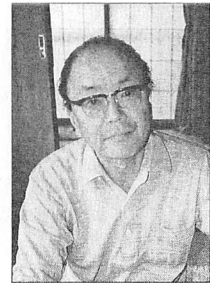


ドジョウ捕りの仕掛けを手にする荒木義信さん

言つて表情をくもらせる。戦後間もないころから定年退職するまで、苫小牧と恵庭で高校教員(生物担当)をやってきた。一九五〇年、生

われるものがあまりに大きかったからである。一年が経過したいま、放水路計画はなんら進展していない。

徒たちとウトナイ南東部の砂丘地域を巡見したのが、中居さんの出発点だ。当時、ウトナイ・ト(アイヌ語で沼



ウトナイ湖の植生調査をライフワークにする中居正雄さん

の意」と呼ばれていた一帯は、交通の便も悪くて道もなく、沼があることを知る市民は少なかった。五年の苫小牧工業港(西港)着工のころ、「勇払原野がなくなる」と直感した中居さんは、8ミリ映画を撮影したりして、原野の様子を記録する作業を始めた。

湖畔にユースホステルやキャンプ場が開設され、市民の憩いの場になってきた六〇年代初期の五年間、生物研究部の生徒たちと「ウトナイ沼総合調査」を実施する。湖に関する調査報告は、昭和初期のものが一点あるだけで、何

けなんです。朝焼けのなかでハクチョウを撮影した受賞歴のある人、わたしたちのようなただ写している人、それに子どもたちも出展しますよ。段ボールをリサイクルして、布を張って額縁を作ったりしているんです」

と、同会の事務局長・舘崎やよひさんは準備に余念がない。細く長く、女性らしく、市民にアピールできるもの——という思いで、この写真展を続けてきた。

苫小牧生まれの舘崎さんは、転勤族の夫とともに寿都や利尻など日本海側の町を転々とした。山や海の景色を見て魂が洗われる思いがする体験をしたが、郷里に帰ってくるたびに街並みが変わり、寂しさが募つた、という。

十年あまり前、草創期のサンクチュアリを新聞記事で知る。訪れてみて、「ここだけは変わらない場所なんだ」と実感し、帰郷するたびにのぞくようにした。やがて、市内に落ちついた舘崎さんは、放水路計画に対して、「ふるさとの自然を残さないと、魂を売り渡すことになるんじゃないか。あそこには放水路はいらない」という思いを抱くようになった。

八九年に発足した大地の会の前身は、女性たちの脱原発グループ。いろんな活動を展開したが、難しい名前の会では続かない。核のことだけにとらわれずに、問題意識を育てよう」とスタイルを変えて、地元の問題に目を向けていった。

九二年の第一回写真展は、意気込んで公民館やデパートなど七会場で開催した。ウトナイ湖や美々川を愛する市民として、時間の経過に伴う湿原の変化をとらえたいという——趣旨で市民に出席を呼びかけて、毎回五十年前後の写真が集まってくる。

美々川の源流部でたまたま出会ったカメラマンに、「新聞で見ましたよ。僕も出します」と言われた。何度も出展する人もいる。市内の中学校で「湿原写真展」を開いたこともあった。

最初に相談に乗ってくれた写真愛好者に、「十年間は続けます」と約束した。折返点の来年は、プロと市民の写真とを併せて展示する企画も練る。「女性が変わらなければ、世の中変わらない。お母さん写真展」として息長く続けて、ウトナイを身近に感じられればいいですね(舘崎さん)

もかも手探りの状態だった。その後、ほぼ十年ごとにウトナイ湖北岸の植生分布を調べ続けている。

「最初の十年間でハンノキ林が増えていた。湿原の水位が下がったからで、普通なら百年のオーダーで変わる植生が、十年くらいで変化するほど開発行為の影響が大きかった。それでやむなく三回、四回と調査を重ねるようになったんですよ」

ウトナイ湖を含む勇払湿原が減った原因は、苫小牧東部開発や勇払川の直線化などによるところが大きい。昭和初期に比べると、ウトナイ湖の水位は六十cm以上も低下し、面積は三百七十五ヘクタールから二百三十二ヘクタールへ三分の二にまで減った。地下の見えないところは分からないことだらけ、「幅三百mの放水路を造つたらどうなるか、素人でも分かるはずだ」と中居さんが憤る。

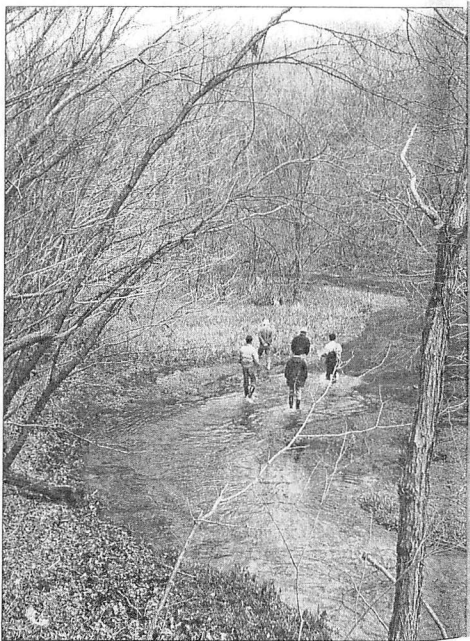
写真展を続ける女性たち

女性グループ・大地の会(山川美代表・約五十人)の主催する「ウトナイ湿原讃歌写真展」が、苫小牧市内で開かれるようになって四年目になる。

湿原の乾燥度の指標となるハンノキ林は、今後も増えつづけると予測している。苫小牧市の資料に収録された中居さんの調査結果は開発局にも渡っているようだが、「開発局がわたしの元へ意見を聞きにきたことはない」というから、ずいぶんお粗末な役所である。「開発局は、あらゆる予測データを出して、賛否双方の学者の議論を戦わせて、(局側が)負けたら降りるべきだ。それと並行して、苫小牧、千歳、恵庭の行政も集まって徹底的に議論していくといいんじゃないか」と中居さんが力説する。

七月からは、八四年に始めた水性植物の調査を行なうためにウトナイ湖通いが始まった。周囲の湿地が少なくなり、野鳥がウトナイ湖に集中して水草も減った。鳥が増えたことを手放しては喜べない現実もあるが、夏の間、カヌーの上から湖と接する日々が続く。

今年は十月一日から同三十日まで、ファミリーミナルとウトナイ湖ネイチャーセンターの二会場で開催される。「ウトナイの魅力を伝えたいというだ



早春の美々川源流部。豊かな湧き水が清冽な流れをつくる

地元自然に目に親しみながら、写真という表現方法で放水路計画を問う

開発事業の狭間で新たな胎動

ウトナイ湖一帯は、八一年にサンクチュアリ第一号に指定されており、野鳥の会のスタッフが常駐する。チーフレンジャーの大畑孝二さん(35)が赴任したのは八三年のこと。初めは美々川の源流がどこにあるのかも知らなかったが、勉強を積み重ねるなかで危機感を強めた。放水路反対運動にとつて、今では欠かせない存在である。

見学者の案内や野鳥観察、ネイチャーセンターの運営と忙しい日々を送ってきた大畑さんの十二年間には、自

営みが、少しずつ輪を拡げている。

然環境の変化を肌で感じるさまざまな出来事があった。サギの仲間でサンカノゴイという、夜になると鳴く野鳥がいた。戦後間もない時期までウトナイ湖周辺にたくさん生息し、鳴き声がうるさくて、夜眠られないうらいだった、という。大畑さんは赴任当初、ウトナイ湖で一回だけ観察したもの、その後は姿を見えない。流域のオタルマップ湿原で観察したことがあったが、近くにゴルフ場が造成されて、そこも安息の地では

なくなつてしまった。

北海道だけに繁殖するアカエリカイツブリという鳥が、今では繁殖しなくなった。九一年まで五年連続で立ち寄っていたコウノトリも、近頃はやつてこない。鶴川の河口部などには確認されていないが、さまざまな開発で騒がしいウトナイ湖は嫌われたらしい。

放水路計画が足踏みを続ける間にも、ウトナイ湖周辺は開発事業に挟撃されてきた。来た当時は3カ所だった美々川流域のゴルフ場が、バブル経済の余波もあつて七カ所に増えた。千歳湖のすぐそばで「美々プロジェクト」の造成工事が始まり、「ハイテク汚染の心配がある。ゴミ処理施設や区画整理事業、空港滑走路の延長などと、自然環境を脅かす問題も山積している。

「ラムサール条約の登録湿地に指定さ



大地の会のメンバーたち
（「湿原写真展」の会場で）

れたこともあつて、わたしが来たころに比べてウトナイ湖に対する認識は深まったと思う。少人数だった放水路の反対運動も、市民グループや漁業者の動きも含めて、全道・全国的な問題になりました」

と大畑さんは振り返る。最近、道央市民生協（本部・苫小牧市）が関係者を招いて放水路計画について勉強会を開いているほか、北大のゼミの学生



野鳥の観察を続けてきた
大畑孝二さん

やキリスト教関係者らがサンクチュアリを訪れて学習するなど、少しずつ関心の広がりを見せる。

ウトナイ湖や美々川などの流域の貴重な自然をどう守っていくのか——このテーマと千歳川放水路問題とは、密接な関係にある。それだけに、身近な環境に愛着を寄せる人たちの言葉から、わたしたちが教えられるものが数多くあるのではないだろうか。